

伊野川から忠別川までの地名②6

ホトウイパウシと立岩山チャシ

掲載図は、国土地理院の平成十八年発行の二万五千地形図に、アイヌ語地名を記載したものである。平成二十六年に閉鎖された北海道東海大学の旭川キャンパスが掲載されている。そこにある三角点が、一四一・七呎であり、この山が、ホトウイパウシと呼ばれていた。現在は、立岩山の名称である。

写真は、サイクリングロード(旧JR函館本線)から、平成二十六年に撮影した、ノチュウ(nociw 星)とホトウイパウシである。

昭和六年発行の近江正一著『伝説の旭川及其附近』の中で、「ホトイパウシ(呼ぶ丘)の伝説」として、次のように紹介している【註一 二段落構成に改

編、句読点も適宜付した】。

往古、上川平野に大洪水があった。当時の酋長が此の処に立って、避難するアイヌウタリ(同胞)を呼び集め、前面の嵐山、近文山に避難した一族の安否を心配して、大声で問ふた事から此の名が起ったものでであると云はれている。

また、昔、此の地にポルクニウングルといふ大酋長が要塞を構へ、時々はその強力なるシャマイグルと戦争を交へたといふユーカラも残されている。

ホトウイパウシは、「ホトウイパウシ(hotuypa-us-i 大声で叫び・ついている・所)」の意味である。右の伝説のように、上川盆地が大洪水に見舞われ、石狩川対岸の嵐山と近文山に避難した同族の安否を心配して、ここに避難した酋長が、大声で安否を尋ねたことに由来するといふ。



ノチュウとホトウイパウシ

掲載図の石狩川対岸のホトウイエウシ(hotuye-us-i 叫び・ついている・所)といふ所で呼ぶ所は、当連載⑬の知里真志保の地名解で、「オサラッペ川の川口左手の崖の上は、江丹別の方から峰伝いに出てきた人が、そこへ立って大声をあげて、対岸の部落から舟を呼ぶ場所だった。」と、往時の伝承を紹介した。

ホトウイエ(hotuye 呼ぶ)は、ホトウイパ(hotuypa 大声で叫ぶ)の単数形である。この「ホトウイエウシ(呼び・つけている・所)」にもチャシ(casi 砦)があったことも述べたところであるが、平成十四年発行の『旭川市博物館研究報告第八号』では、「オトウイパウシチャシ」となっている。上川アイヌの発音で、よくあるといわれる「h音」の脱落表記である。「ホトイパウシ(呼ぶ丘)の伝説」

の中の洪水から遁れるために避難した「嵐山」は、具体的には、このチャシを指している。

また、洪水伝説では、「男山自然公園」のある突峭山(とつしょうざん)が有名で、知里真志保は、「昔、洪水があった時、この山の頂きに綱を張ったぐらい乾いた所があった、そこに逃げた人々だけが助かった」という伝説があり、アイヌはトウッソ(tussoo トウク・ソ)(tuk-soo 突き出た・壁)の転訛↓絶壁を、トウシン(tus-so 綱・床)の意と解している。」と述べている。ここにも、「突峭山チャシ」があった。

さて、「立岩山チャシ」はこの呼称も『旭川市博物館研究報告第八号』によったものである。このチャシは、前回紹介したように、昭和二年五月二十日、郷土研究家の斎藤讓三氏が発見したという。当時は「ホトイパウシチャシ」と呼ばれていたが、東海大学文学部考古学研究室と旭川博物館の調査報告書では、「立岩山チャシ」と呼称されている。

旭川市博物館の報告書では、立岩チャシの濠内側に所在する落ち込みが、縄文時代中期の住居址であることが判明したが、チャシと関連するような遺物は確認できなかったという。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

断章 旭川のアイヌ語 地名研究

136

高橋 基



「ホトイパウシ(呼ぶ丘)の伝説」